青年期(大学生)における自己開示性とその性差について¹

名城大学 榎 本 博 明²

Self-disclosure patterns of college students and their gender-differences
in the patterns

Hiroaki Enomoto (Meijo University, Tenpaku-ku, Nagoya 468)

Self-disclosure patterns of adolescents were examined. Subjects (105 male and 159 female college students) were requested to complete the questionnaire on self-disclosure of 11 different aspects of self to four target-persons (father, mother, the best friend of same sex, the best friend of opposite sex). The following results were found. Both male and female showed the highest self-disclosure to the best friend of same sex, while the lowest to father. But sex differences were found in regard to both overall extent and pattern of self-disclosure. Female disclosed significantly more than male, especially to mother. Although male put the focus of self-disclosure on only the best friend of same sex, female put it on both the best friend of same sex and mother. Moreover, the subjects tend to vary the extent of self-disclosure with respect to the category to which each item about the self belonged. There was the interaction among sex, target-persons, and aspects of self.

Key words : self-disclosure, aspects of self, interpersonal relations, intimacy, adolescence, gender-difference.

自己の内的世界を他者に知らせるという行為は、社会的存在としての人間には欠かすことのできないものであり、誰もが日常いたるところで経験していることである。このような日常的かつ重要な現象を自己開示 (self-disclosure) という概念を用いて心理学研究の対象としたのは、Jourard (1958) である。Jourard は、自己開示とは他者が知覚しうるように自分自身をあらわにする行為であるとし、さらに、自分にとって重要な他者に十分に自己開示できるということは健康なパーソナリティにとって必須の条件であるとしている (Jourard, 1959)。本来自己開示には言語的なものも非言語的なものも含まれるはずであるが、Jourard 以来これまでの諸研究は言語的手段による自己開示に範囲を限っているようである。

自己開示を健康なパーソナリティに必須の条件とする見方は、その後多くの研究者、とくに心理臨床に関わる者によって支持されており (Maslow, 1954; Mowrer, 1964; Rogers, 1961)、それを支持する報告もあれば (Chelune, Sultan, & Williams, 1980; Cunningham & Strassberg, 1981; 榎本, 1982; Halverson & Shore, 1969; Himelstein & Lubin, 1966; Lombardo & Fan-

tasia, 1976; Mayo, 1968; Pedersen & Higbee, 1969; Solano, Batten, & Parish, 1982)、何の関係も見出すことができなかったという報告もある (Burhenne & Mirrels, 1970; Doster & Strickland, 1969; Fitzgerald, 1963; Pedersen & Breglio, 1968; Stanley & Bownes, 1966)。自己開示傾向と精神的健康および適応の関係に関する諸研究の結果が一貫していない理由の 1 つとして、開示相手が適切に選ばれていないのではないかとということが考えられる (Zeedyk-Ryan, Carman, & Fitzgerald, 1981)。すなわち、実験室で初めて出会った見知らぬ人を相手とする自己開示行動の傾向と、自分にとって重要な人物に対して普段示している自己開示傾向とを区別して考えなければならないであろう。

健康なパーソナリティとの関連で進められた自己開示研究は、その後パーソナリティ以外の分野にも浸透してきている。ひとつの流れは、心理臨床の分野における治療者の自己開示に関する研究である。Jourard が臨床家としての実践活動のなかで治療者の中立性に対して抱いた疑問が自己開示という概念を生んだことを考えると、これは方法論的に困難が多いかもしれないが重要なテーマであろう。もうひとつの流れは、社会心理学の分野における親密化過程および好意性の研究である (榎本, 1983)。

このように、自己開示研究はさまざまな形で発展し、自己開示のさまざまな性質や意義が明らかになってきている。しかし、これらは主にアメリカ人を対象として得

¹ 本研究は、1981年度に東京都立大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文の一部であり、日本心理学会第 46 回大会において口頭発表したものである。

² 本研究をまとめるにあたって御指導くださいました東京都立大学詫摩武俊教授に心より感謝いたします。

られたものであり、文化的に異なる、とくに意思伝達における言語の機能が著しく欧米の文化と異なるわが国においては、自己開示行動のあり方もその意義も異なるであろうと思われる。

そこで、自己開示研究の基礎として、まず言語的な自己開示に限って、わが国の青年の日常生活における自己開示行動の実態を把握することを本研究の目的とする。従来このような研究には、Barnlund (1975)、久世・蔭山 (1973)、加藤隆勝 (1977) がある。Barnlund は Jourard の 6 領域 (意見, 趣味, 仕事など) からなる質問紙を用い、加藤は 8 領域 (身体, 趣味, 学校生活, 性格など) からなる質問紙を独自に開発している。これらにはちょっとした世間話程度の浅い内容も含まれているが、本研究では比較的深い内容、自己の内面をさらけ出すというにふさわしい自己開示に絞ることとする。また、久世・蔭山は、比較的深い自己開示を扱っているが、具体的に困った場面を設定し、そのとき悩みを打ち明けるかどうかを問題としている。これに対して本研究では、とくに困った場面に限定せず、日常的な場面でどの程度自己開示しているか問うことにする。

方 法

社会心理領域における親密化過程の研究や臨床領域におけるカウンセリング場面の研究などでは、人為的に設定された場面における初対面の者に対する実際の自己開示行動を観察者が評定するという方法が多く用いられている。しかし、本研究のように日常生活における自己開示傾向を測定する場合には、自己評定式の質問紙法が用いられることが多い。その際、よく用いられるのが JSDQ-60 (Jourard Self Disclosure Questionnaire の 60 項目版) およびその短縮版であり、わが国で実施された研究のほとんどがその翻訳版を用いている。Jourard の自己開示質問紙は、6つの領域〔態度・意見, 趣味・興味, 仕事 (勉強), 金銭, 性格, 身体〕から成り、各領域に 10 項目、計 60 項目の内容 (話題) で構成されている。開示相手として、父親, 母親, 最も親しい同性の友人, 最も親しい異性の友人あるいは配偶者が与えられており、それぞれに対して各項目についてどの程度話しているかが問われるのである。

JSDQ-60 のような質問紙を用いた場合、趣味や勉強のことは開示しやすく、金銭, 性格, 身体は開示しにくいという大雑把な傾向しかつかめないと考え、本研究では特に自己の私的な側面に焦点を当て、比較的深いと思われる自己開示行動を取り上げることとする。

そのために自己を 11 の側面に分け (Table 1)、それぞれの側面にあてはまる項目を作成した。すなわち、まず自己を精神的自己, 身体的自己, 社会的自己, 物質的自己, 血縁的自己, 実存的自己の 6 つに分類した。そし

Table 1
自己の側面別開示度

自 己 の 側 面			開 示 度	
			男子	女子
1	精神的自己	知的側面	.99	1.08
2		情緒的側面	.77	.95
3		志向的側面	1.00	1.03
4	身体的自己	外見的側面	.63	.87
5		機能的側面	.86	.98
6		性的側面	.53	.59
7	社会的自己	私的側面	.73	.81
8		公的側面	.90	.93
9	物質的自己		.84	.99
10			.57	.83
11	実存的自己		.70	.85

て、さらに精神的自己を知的側面, 情緒的側面, 志向的側面の 3 つに、身体的自己を外見的側面, 体質・機能的側面, 性的側面の 3 つに、社会的自己を私的・公的側面の 2 つにそれぞれ分類した。予備調査により項目の選定を行い、最終的に各側面 4 項目、計 44 項目の自己開示質問紙が作成された。たとえば、“心をひどく傷つけられた経験” “掘りどころとしていた価値観” “外見に関する悩み事” “性器に対する関心や悩み事” “友人関係に求める事” “人生における仕事の位置づけ” “親に対する不満や要望” “人生における虚しさや不安” などといった項目からなっている。折半法による信頼性係数は 0.92 (男子 0.91, 女子 0.94) であった。

開示相手は、父親, 母親, 最も親しい同性の友人, 最も親しい異性の友人の 4 者とし、それぞれの相手に対して、全く話したことがない、あるいは偽っている場合に 0、一般的なことだけ話している場合に 1、充分詳しく話している場合には 2 を、各項目ごとに記入することを求めた。

被験者 大学生 264 名 (男子 105 名, 女子 159 名).
実施期日 1981 年 7 月.

結 果

全項目に対する被験者の回答の平均は 0.85 (男子 0.78, 女子 0.90) であり、自己開示はあまりなされていないことがわかる。しかし、開示する側面別、相手別にみていくと、よく開示されているものからほとんど開示されていないものまで顕著な違いがみられる。

側面別自己開示度

自己の 11 の側面ごとの開示度は Fig.1 のようにな

った。最もよく開示されるのは精神的自己の知的側面 (1.05) と志向的側面 (1.02) に関するものであり、これらは一般的内容の水準 (1.0) を上回って開示されている。1.0 を越えてはいないがそれらに次いでいるのが物質的自己 (0.93)、身体的自己の機能的側面 (0.93)、社会的自己の公的側面 (0.92) などである。反対に、最も開示される程度の低いのは性的側面 (0.56) であり、他と比べて際立って低くなっている。血縁的自己 (0.73)、社会的自己の私的側面 (0.78)、身体的自己の外見的側面 (0.78) などあまり開示されないようである。

男女別にみると、全ての側面において女子の開示度が男子のそれを上回っている。しかし、上にあげたような傾向は男子にも女子にもほぼ共通してみられた。

相手別自己開示度

父親、母親、最も親しい同性の友人、最も親しい異性の友人という4者に対する自己開示度は Fig. 2 に示されている。この4者のうち一般的なこと以上に開示を受けているのは同性の友人 (1.20) だけである。父親 (0.59) はほとんど開示を受けることがなく、異性の友人 (0.78) が開示を受ける程度もかなり低い。母親 (0.92) は同性の友人のつぎに開示を受けやすいことになるが、せいぜい一般的なことが話されているという程度である。

相手別自己開示度に関しては、男子と女子とでかなり異なった傾向がみられる。最もよく自己開示する相手が同性の友人 (男子 1.16, 女子 1.23) であることと、最も自己開示することの少ない相手が父親 (男子 0.53, 女子 0.63) であることは共通している。しかし、母親と異性の友人の順位が男子と女子とで逆になっている。数字でみると、異性の友人に対する自己開示度にはほとんど男女差はみられない (男子 0.76, 女子 0.81) のだが、

Fig. 1. 自己の側面別開示度。* は男女間の平均値の差の有意水準を表わす。(Fig. 2, 3 も同様。)

母親に対する自己開示度の男女差は著しく、女子が男子を大きく上回っている (男子 0.70, 女子 1.07)。そのため、男子では完全に同性の友人中心の開示パターンを示しているのに対して、女子では同性の友人と母親の2者が自己開示の焦点となっている。

(側面×相手) による自己開示傾向

相手によってどのような自己の側面が開示されやすいか、あるいは開示されにくいを示したのが Fig. 3 である。

父親に対する自己開示は、1.0 を越すものがなく全体的にかなり低めだが、精神的自己の知的側面と志向的側面、身体的自己の機能的側面、社会的自己の公的側面などが中心となっている。それに対して、性的側面、社会的自己の私的側面はほとんど全くといってよいほど開示されておらず、身体的自己の外見的側面や実存的自己、精神的自己の情緒的側面などについても開示されることは少ないことがわかる。男女別にみると、物質的自己と血縁的自己で女子がかなり上回っているほかはほとんど差がみられないが、唯一社会的自己の公的側面で男子が女子をわずかが上回っているのが特徴的である。

母親に対する自己開示は、1.0 の上下に幅広く分布しており、側面による違いおよび男女による違いが著しい。物質的自己、身体的自己の機能的側面、精神的自己の知的側面などが開示の中心となっており、性的側面、社会的自己の私的側面、実存的自己などについては開示されることが少ない。男女別にみると、ほぼ同じようなプロフィールを示しているが、全ての側面において女子が男子を大きく上回っており、とくに身体的自己の外見的側面では著しい差がみられる。反対に、社会的自己の公的側面や精神的自己の志向的側面および知的側面では

Fig. 2. 相手別自己開示度。

Fig. 3. 自己の側面別・相手別開示度。

Table 2
相手別にみた開示しやすい自己の側面の順位

自己の側面	男 子				女 子			
	父親	母親	同性	異性	父親	母親	同性	異性
精神的 知的	1	2	3	2	1	3	3	1
自己 情緒的	7	7	3	5	7	8	2	3
志向的	3	4	2	1	3	5	3	1
身体的 外見的	9	8	10	9	7	4	6	8
自己 機能的	4	2	8	7	2	2	9	7
性的	11	11	5	10	11	11	10	11
社会的 私的	10	10	1	3	10	10	1	5
自己 公的	2	5	5	5	4	6	6	6
物質的自己	5	1	9	7	4	1	8	8
血縁的自己	6	6	11	11	6	6	11	10
実存的自己	8	9	7	4	9	9	3	3

男女差はいくらか小さくなっている（いずれにしても全ての側面において 0.1% 水準の有意差がある）。

同性の友人に対する自己開示は、ほとんど全ての側面において 1.0 を越えており、かなり高い数値となっている。社会的自己の私的側面、精神的自己の 3 側面、実存的自己などが開示の中心であり、血縁的自己（これが唯一 1.0 を下回っている）、物質的自己、身体的自己の機能的側面および外見的側面などはあまり開示されないようである。男女別にみると、男女とも同様のプロフィールを示しているが、他の相手に対する自己開示ではほとんど全ての側面で女子が男子を上回っているのに対して、ここではいくつかの側面で男子が女子をわずかながら上回っているのが特徴的である。それは、性的側面、社会的自己の私的側面および公的側面であり、精神的自己の志向的側面では男女の得点が等しくなっている。反対に、男女差が大きいのは血縁的自己であり、身体的自己の外見的側面でもやや大きな差がみられる。

異性の友人に対する自己開示は、父親に対するものと同様 1.0 を越す側面はひとつもなくかなり低くなっており、また側面による開示度の違いは他の 3 者と比べてかなり小さい。ここでは精神的自己の 3 つの側面、実存的自己、社会的自己の私的側面などが開示の中心となっている。これに対して、血縁的自己、性的側面、身体的自己の外見的側面などについては開示されることが少ない。男女別にみると、プロフィールはよく似ており、個々の側面ごとの男女差もきわめて小さいが血縁的自己、精神的自己の情緒的側面、実存的自己などでいくぶん差がみられる（血縁的自己においてのみ有意差）。

以上、4 つの相手別に側面別自己開示度をみてきたが、これらは大きく 2 つのパターンに分類できる。それは、両親（父親、母親）に対する自己開示パターンと友

Table 3
自己の側面別にみた開示しやすい相手の順位

自己の側面	男 子				女 子			
	父親	母親	同性	異性	父親	母親	同性	異性
精神的 知的	4	2	1	3	4	2	1	3
自己 情緒的	4	3	1	2	4	2	1	3
志向的	4	3	1	2	4	2	1	3
身体的 外見的	4	3	1	2	4	2	1	3
自己 機能的	3	2	1	3	3	1	2	4
性的	4	3	1	2	4	2	1	3
社会的 私的	4	3	1	2	4	3	1	2
自己 公的	3	2	1	4	4	2	1	3
物質的自己	4	1	2	3	3	1	2	4
血縁的自己	3	1	2	4	3	1	2	4
実存的自己	4	3	1	2	4	3	1	2
計	4	3	1	2	4	2	1	3

人（同性、異性）に対する自己開示パターンである。このことは Fig. 3 および Table 2 をみれば明らかである。父親に対する自己開示と母親に対する自己開示のいずれにおいても、身体的自己の機能的側面、精神的自己の知的側面および志向的側面、物質的自己、社会的自己の公的側面が中心であり、これらが上位 5 位までを占めている。そして、性的側面、社会的自己の私的側面、実存的自己などについて開示されることはほとんどないといえる。これに対して、同性の友人に対する自己開示と異性の友人に対する自己開示のいずれにおいても、精神的自己の 3 側面と社会的自己の私的側面、実存的自己が中心であり、これらが上位 5 位までを占めている。そして、血縁的自己について開示されることはきわめてまれであり、身体的自己の外見的側面、機能的側面および性的側面などについてもあまり開示されないことがわかる（ただし、数値的には身体的自己の 3 側面の同性の友人に対する自己開示度は 1.0 を越えている）。Fig. 3 のグラフから、精神的自己の情緒的側面、身体的自己の機能的側面、社会的自己の私的側面、物質的自己、血縁的自己、実存的自己などを大ざっぱにみてもわかるとおり、両親に対する開示パターンと友人に対する開示パターンにはかなり相補的なところがみられる。

性 差

これまで随所で男子と女子の自己開示傾向を比較してきた。それによると、自己開示度は明らかに女子が男子を上回っている。そして、自己開示のパターンに関しては、共通点と異なる点がともに明らかになった。すなわち、相手別にみた場合と（相手×自己の側面）でみた場合は男子と女子とで異なった開示パターンが得られたが、単に自己の側面別にみた場合には開示パターンに違

いはみられなかった。

自己開示パターンを相手に関してみると、前述のように男子では同性の友人中心の開示パターンを示しているのに対して、女子では同性の友人プラス母親を中心とした開示パターンを示している (Fig. 2)。

自己の側面別に開示相手の順位を示したものが Table 3 である。これによると、男子の場合の同性の友人 (1 位)、異性の友人 (2 位)、母親 (3 位)、父親 (4 位) という順序の基本型と、女子の場合の同性の友人 (1 位)、母親 (2 位)、異性の友人 (3 位)、父親 (4 位) という順序の基本型がともに、血縁的自己、物質的自己、身体的自己の機能的側面などにおいて両親への重心の移動によって大きく崩れている。

自己開示パターンを側面および相手に関してみると、相手を合計したものについてはほとんど性差はみられないが (Fig. 1)、相手別にみていった場合 (Fig. 3 a-d および Table 2) にはかなり類似しているもののいくつか異なった点がみられる。同性の友人に対する自己開示パターンにおいてとくに性差がみられる。すなわち、実存的自己が女子では開示の焦点の 1 つになっているのに対して男子では中間的なものにとどまっている点、性的側面が男子では上位にあるのに女子では最下位に近くなっている点、身体的自己の外見的側面が男子では下位にあるのに女子では中間的なところに位置する点などである。異性の友人や両親に対する自己開示パターンにはほとんど違いがみられないが、父親に対しては物質的自己と血縁的自己、母親に対しては身体的自己の外見的側面、異性の友人に対しては血縁的自己と精神的自己の情緒的側面でそれぞれ男女差が拡大しているため、グラフの形に男子と女子とでやや違いができています。

自己開示傾向の質的な性差、すなわち開示パターンの性差は以上のようなものであるが、つぎに量的な性差、すなわち自己開示の程度に関する性差を検討する。

量的な性差については、先行研究の諸結果は一貫していない。女子の自己開示度が男子のそれよりも高いという報告も多いが、性差を見出すことができなかったものもある。本研究においては、全体的に女子のほうが自己開示度が高いという結果が得られている。全ての側面において女子の自己開示度が男子のそれを上回っているが、血縁的自己や身体的自己の外見的側面、精神的自己の情緒的側面においてとくに差が拡大している。反対に、精神的自己の志向的側面や社会的自己の公的側面、性的側面においてはほとんど差がなくなっている。

さらに、相手別にみた場合の側面別自己開示度の平均値の差の検定をした結果を Fig. 3 に示した。これを見ると、母親に対する自己開示度には明らかに性差がみられ、全ての側面において 0.1% の有意水準で女子が男子を上回っている。Fig. 3 b をみても、その差がかなり大

きいことがわかる。父親や同性の友人に対してもいくつかの側面で女子の開示度が男子のそれを有意に上回っているが、各側面を合計した得点では父親に対する自己開示度においてのみ有意な差となっている。また、同性の友人に対する性的側面の開示度だけは、唯一男子が女子を有意に上回っている。異性の友人に対しては、血縁的自己において女子の開示度が男子のそれを有意に上回っているだけで、それ以外の各側面において有意差はみられない。したがって、自己開示度には明らかに性差がみられ、女子が男子を上回っており、相手別にみると両親とくに母親に対する場合に大きな差がみられるが、友人とくに異性の友人に対する場合にはほとんど差がみられないことがわかる。

考 察

自己開示質問紙を用いた調査により、大学生における自己開示傾向のいくつかの特徴が明らかになった。

相手による自己開示度の違いに関しては、男女とも同性の友人に対する自己開示度が最も高く、父親に対する自己開示度が最も低いことが明らかになった。この結果は、大学生を用いた諸研究の結果と一致するものである (Melikian (1962) は中近東において行った調査により全く異なった結果を見出しているが、これに関してはイスラム圏における女性の地位という文化的要因が強く関係していると思われる)。ただし、同性の友人に次ぐものが母親であるとする研究結果もあれば (加藤義明, 1977 ; West & Zingle, 1969)、異性の友人であるとする研究結果もある (Barnlund, 1975)。本研究においては、男女で異なった傾向がみられ、女子では同性の友人に次いで母親に対する自己開示度が高くなっているが、男子ではかなり差はあるが異性の友人が同性の友人に続いている。これは Jourard & Richman (1963) や Rivenbark (1971) の結果とも一致している。

Jourard (1961) や Rivenbark (1971) などの報告により、青年期の前期には母親および父親が自己開示の中心であるが、友人の地位が上がり、両親の地位が下がることによって、しだいに同性の友人が中心的地位を占めるようになり、さらに青年期の終り頃からは異性の友人 (あるいは配偶者) が自己開示の中心的相手となることが予想されるが、男女の性質の違い、および発達的にみた個人差を考慮する必要があるであろう。今後、愛着の対象の変遷とも関連づけながら、自己開示の中心的相手を異にする者たちの特性を分析することにも意義があると思われる。

自己の側面による開示度に関してもいくつかの知見が得られた。個々の内容は結果のところにまとめてあるので省略するが、従来の Jourard の質問紙を用いた諸研究よりは深い自己開示について青年期の傾向を把握すること

ができたと思われる。ただし、本研究で用いられた自己の諸側面にもっと表面的な話題も加えたならば、さらに違った切り口からのアプローチも可能となるであろう(榎本(1984), 榎本・林・塩崎(1984)などでは、本研究で用いられた自己の11側面に趣味, 意見, うわさ話といった側面を加えた質問紙が用いられている)。

性差に関しては、従来の諸研究は量的な差はあるが質的な違いはないとするものが多い。ただし、量的な差に関しても一貫した結果が得られているわけではなく、女性のほうが男性よりも自己開示度が高いとする報告もあれば(Dimond & Munz, 1967; Gitter & Black, 1976; Himelstein & Lubin, 1966; Hood & Back, 1971; Jourard & Landsman, 1960; Jourard & Lasakow, 1958; Jourard & Richman, 1963; LeVine & Franco, 1981; Pedersen & Breglio, 1968; Pedersen & Higbee, 1969; Rivenbark, 1971), 性差はみられないとする報告もある(Barnlund, 1975; Certner, 1973; Dimond & Hellkamp, 1969; Doster & Strickland, 1969; Plog, 1965; Vondracek & Marshall, 1971; Weigel, Weigel, & Chadwick, 1969)。このような一貫性の欠如に関しては、実験室における初対面の者への自己開示や日常親しくしている者への自己開示など、性質を異にする問柄を区別することが必要と思われる。Stokes, Fuehrer, & Childs (1980)によると、初対面の者やちょっとした知り合いに対する自己開示度は女子より男子のほうが高いが、親しい者に対する自己開示度は男子より女子のほうが高かった。本研究では、男子より女子のほうが高いという結果が得られたが、ごく身近な者に対する自己開示を扱っているので、Stokes et al. の結果に一致するものである。

本研究においては、さらに質的な違いも見出された。詳細は結果に譲るが、主な自己開示相手に関しても、開示しやすい自己の側面に関しても、性差がみられた。

なお、自己開示性をパーソナリティの健康性などとの関連で捉えようという場合には、集団平均値や性差ばかりでなく、個人差の視点を取り入れ、個人のパーソナリティ構造や欲求を通してみていくことが必要と思われる。

引用文献

- Barnlund, D. C. 1975 *Public and private self in Japan and the United States*. Tokyo: Simul Press.
- Burhenne, D., & Mirels, H. L. 1970 Self-disclosure in self-descriptive essays. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **35**, 409-413.
- Certner, B. C. 1973 Exchange of self-disclosures in same-sexed groups of strangers. *Journal of consulting and Clinical Psychology*, **40**, 292-297.
- Chelune, G. J., Sultan, F. E., & Williams, C. L. 1980 Loneliness, self-disclosure, and interpersonal effectiveness. *Journal of Counseling Psychology*, **27**, 462-468.
- Cunningham, J. A., & Strassberg, D. S. 1981 Neuroticism and disclosure reciprocity. *Journal of Counseling Psychology*, **28**, 455-458.
- Dimond, R. E., & Hellkamp, D. T. 1969 Race, sex, ordinal position of birth, and self-disclosure in high school students. *Psychological Reports*, **25**, 235-238.
- Dimond, R. E., & Munz, D. C. 1967 Ordinal position of birth and self-disclosure in high school students. *Psychological Reports*, **21**, 829-833.
- Doster, J. A., & Strickland, B. R. 1969 Perceived child-rearing practices and self-disclosure patterns. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 382.
- 榎本博明 1982 青年期における自己開示性(1) 日本心理学会第46回大会発表論文集, 299.
- 榎本博明 1983 対人関係を規定する要因としての自己開示研究 心理学評論, **26**, 148-164.
- 榎本博明 1984 青年期における自己開示性(3) 日本心理学会第48回大会発表論文集, 563.
- 榎本博明・林 洋一・塩崎万里 1984 青年期の対人関係(1) 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 130-131.
- Fitzgerald, M. P. 1963 Self-disclosure and expressed self-esteem, social distance and areas of the self revealed. *Journal of Psychology*, **56**, 405-412.
- Gitter, A. G., & Black, H. 1976 Is self-disclosure self-revealing? *Journal of Counseling Psychology*, **23**, 327-332.
- Halverson, C. F., & Shore, R. E. 1969 Self-disclosure and interpersonal functioning. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 213-217.
- Himelstein, P., & Lubin, B. 1966 Relationship of the MMPI K scale and a measure of self-disclosure in a normal population. *Psychological Reports*, **19**, 166.
- Hood, T. C., & Back, K. W. 1971 Self-disclosure and the volunteer: a source of bias in laboratory experiments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **17**, 130-136.
- Jourard, S. M. 1958 A study of self-disclosure. *Scientific American*, **198**(5), 77-82.
- Jourard, S. M. 1959 Self-disclosure and other-cathexis. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **59**, 428-431.
- Jourard, S. M. 1961 Age trends in self-disclosure. *Merrill Palmer Quarterly*, **7**, 191-197.
- Jourard, S. M., & Landsman, M. J. 1960 Cognition, cathexis, and the 'dyadic effect' in men's self-

- disclosing behavior. *Merrill Palmer Quarterly*, 6, 178-186.
- Jourard, S. M., & Lasakow, P. 1958 Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, 19-98.
- Jourard, S. M., & Richman, P. 1963 Disclosure output and input in college students. *Merrill Palmer Quarterly*, 9, 141-148.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ No. 14 日本心理学会
- 加藤義明 1977 自己表出性に関する研究 I 日本心理学会第 41 回大会発表論文集, 1218-1219.
- 久世敏雄・蔭山英順 1973 「困った場面」における自己開放性についての一研究 依田 新(編) わが国における青年心理学の発展 金子書房 Pp. 151-170.
- LeVine, E., & Franco, J. N. 1981 A reassessment of self-disclosure patterns among Anglo-Americans and Hispanics. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 522-524.
- Lombardo, J. P., & Fantasia, S. C. 1976 The relationship of self-disclosure to personality, adjustment, and self-actualization. *Journal of Clinical Psychology*, 32, 765-769.
- Maslow, A. H. 1954 *Motivation and personality*. New York: Harper & Row.
- Mayo, P. R. 1968 Self-disclosure and neurosis. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 7, 140-148.
- Melikian, L. H. 1962 Self-disclosure among university students in the middle east. *Journal of Social Psychology*, 57, 257-263.
- Mowrer, O. H. 1964 *The new group therapy*. New York: Van Nostrand.
- Pedersen, D. M., & Breglio, V. J. 1968 Personality correlates of actual self-disclosure. *Psychological Reports*, 22, 495-501.
- Pedersen, D. M., & Higbee, K. L. 1969 Personality correlates of self-disclosure. *Journal of Social Psychology*, 78, 81-89.
- Plog, S. C. 1965 The disclosure of self in the United States and Germany. *Journal of Social Psychology*, 65, 193-203.
- Rivenbark, W. H., III 1971 Self-disclosure patterns among adolescents. *Psychological Reports*, 28, 35-42.
- Rogers, C. R. 1961 *On becoming a person*. Boston: Houghton Mifflin.
- Solano, C. H., Batten, P. G., & Parish, E. A. 1982 Loneliness and Patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 524-531.
- Stanley, G., & Bownes, A. F. 1966 Self-disclosure and neuroticism. *Psychological Reports*, 18, 350.
- Stokes, J., Fuehrer, A., & Childs, L. 1980 Gender differences in self-disclosure to various target persons. *Journal of Counseling Psychology*, 27, 192-198.
- Vondracek, F. W., & Marshall, M. J. 1971 Self-disclosure and interpersonal trust: an exploratory study. *Psychological Reports*, 28, 235-240.
- Weigel, R. G., Weigel, V. M., & Chadwick, P. G. 1969 Reported and projected self-disclosure. *Psychological Reports*, 24, 283-287.
- West, L. W., & Zingle, H. W. 1969 A self-disclosure inventory for adolescents. *Psychological Reports*, 24, 439-445.
- Zeedyk-Ryan, J., Carman, R. S., & Fitzgerald, B. J. 1981 The recipient of self-disclosure. *Journal of Psychology*, 109, 123-125.

—1986. 7. 9. 受稿, 1986. 11. 15. 受理—